木と共に生きて

細田安治

■■5■■

小学校を6回転校

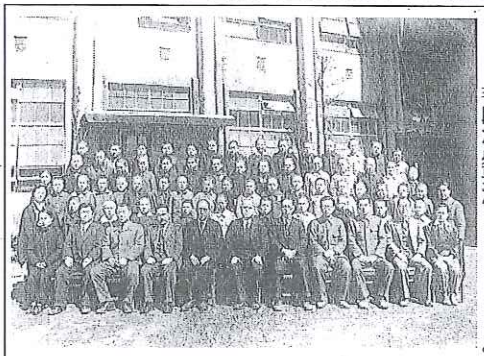
新潟の集団疎開に合流

山形県米沢市の田沢の小学校は、一週間通っただけだ。私と弟の孝治は、東京の明治国民学校が集団疎開先である新潟県岩船郡女川村大字湯沢へ行くことになった。米坂線の越後下関駅の湯沢温泉だ。

ここは過疎のなかの過疎であり、山越え約1時間の道のりの川北国民学校へ通った。ここでは、1学年1組にまとめられている。

授業は毎日5時限おとなわれたが、こんな状態だからろくな勉強ができなかった。文房具不足で田舎の子供に文房具を奪われたが、木刀で対抗し追い払った。

◇ここでの教訓　集団の力は大きい。時には自衛手段が必要だ。



明治第一国民学校の卒業式（筆者は最上段右端）

ひと握りの大豆飯で満腹感

疎開の思い出はいろいろあるが、腹が減ったことが一番記憶に残っている。食糧不足の影響が疎開児童まで及んだ。

ご飯は、大豆搾りかすご飯とたくわん、湯だし汁だけの文字どおりの一飯一汁の食事だ。食前に向かうと、先生ともども手を合わせ「天の恵みに感謝し・・・お父さんお母さん頂きます」とにかく全員で大きな声で唱和してから食べ始める。

先生からは「ご飯は、100回数えて噛みなさい。よく噛めば、栄養もとれるし、お腹も一杯になる」と繰り返し教えられた。私たちはこの教えを忠実に守り、一握りの大豆搾りかすご飯を最初に大豆だけ拾い出して、なんどもなんども噛む顎がつかれるくらい噛むと大豆はなくなる。次に、米だけのご飯を味合うようにゆっくりよく噛んで食べる。

このご飯の美味しいこと、この美味しさはいまでも忘れられない。

噛むのを数えれば100回ぐらいだ。そして不思議なことに、ほんの一握りの、大豆ご飯でお腹がいっぱい満腹になったような気がする。これは、顎が疲れて、満腹感とすり替えられ錯覚を起こすわけである。

錯覚であれ、限られた食料のなかで先生方は、よく噛めばお腹がいっぱいになり栄養にもなる。物の尊さを、私たちが身を持って体験ができたことを心から感謝申し上げます。

◇ここでの教訓　食料は尊いもの。大事に使えば長持ちする。少ないご飯もよく噛めば満腹になり栄養になる。

坂町駅で機銃掃射を受ける

いよいよ引っ越しだ。当時の疎開児童は何人いたのかはっきりした記憶はないが、学童は4～6年各10人、3年が3人、先生が2人の計35人ぐらいではなかったかと記憶している。

徒歩で米坂線の越後下関駅まで行き、米坂線に乗車して2つ目の終点坂町駅で羽越本線に乗り換えることになった。

下車してプラットホームに整列した途端に空襲警報が発令される。ほとんど同時に、グラマン戦闘機が坂町駅目がけて爆撃と機銃掃射してきた。

先生の誘導でホームを結ぶ連絡通路の地下道に退避した。爆弾の爆発音と機銃掃射のバリバリ音はツンボになりそうな大音響であったが、指で耳栓し床に伏せた。

私は気賀で機銃掃射と爆撃を体験している。防空壕に何度も避難した。この地下道はこれ以上ない堅固な防空壕で全然怖くなかった。爆弾の直撃を受けなければここなら大丈夫だ。

3年、4年の低学年児童は爆撃や機銃掃射など経験がないので怖がって泣き出す児童もいたが、ここなら大丈夫と励ました。

◇ここでの教訓　経験はいかに貴重なものかを学んだ。

瑞雲寺

お寺での生活は、腹が減ることを除けば以前ほど苦痛ではなかった。先生方や若い寮母さんにお世話になった。お寺のお嫁さんで赤ちゃんをおんぶして炊事洗濯にと大変よくして頂いた。

42年後の1987年（昭和62年）に瑞雲寺を訪問しご挨拶申し上げた。

その時、上品な老婦人に若い寮母さんの面影から、当時の記憶が走馬灯のように想起し感激に震える思いであった。戦争中で大変な時期に親元を離れた子供たちは淋しさを忘れて元気に勉強し走り回っていたと思い出を話された。

当時おんぶされていた赤ちゃんは瑞雲寺の現ご住職である。瑞雲寺の木造建物は当時のままだ。渋柿をほおばり下痢を止めたこと、不要になった火薬原料の「よもぎ」は小谷先生がたばこ代わりに一服したが、忽ちゴホンゴホンとせき込む様子がおかしく、ヨモギ爺やとあだ名をつけたことなどなど思い出は尽きない。

◇ここでの教訓　お世話になったことを忘れてはならない。

終戦・玉音放送

1945年（昭和20年）8月15日、天皇陛下より重大なお言葉があり、ラジオからの陛下のお言葉は途切れ途切れで理解もできなかったが、小谷先生から「どうやら日本は戦争に負けたらしい」「日本は無条件降伏した、戦いは終わった。戦争に負けたことになるが、日本はこのままではない、今日の屈辱を晴らす日が来る、忘れずに、頑張ろう」という意味のことをおっしゃった。口惜し泣きしながらの訓示をはっきり記憶している。

日本は、そして私たちはどうなるのか、集まった疎開児童のなかには、泣き出すものが出るほどの恐怖感で、これからどうなるか、どうすればよいか、強い不安に襲われた。後年、日本は経済大国になりこのときのことを晴らした思いだ。

東京へ帰る

11月ごろ、父より戦争は終わったから東京へ帰って来いと指示を受け、焼け野が原の東京へ帰った。焼け野が原というが、正に言葉の通りだ。

千石の自宅から西は箱根の山の向こうに富士山の全容が丸見えだった。東は焼け野が原から朝日が昇る、東西南北何もない焼け野が原だ。残っているのは豪商の蔵の残骸、開けられた金庫などがポツンポツンと残っている程度だった。このような状態を焼け跡と言うのか。

東京へ帰り、早速、明治国民学校へ転入した。これで学校は6校目だ。明治、気賀、田沢、山北、猿沢、明治に戻ったことになる。それも2年間でだ。焼け野が原を弟孝治と2人で通い、翌46年（同21年）4月に卒業した。卒業生は男わずかに57人、教師14人だ。

◇ここでの教訓　ゼロから立ち上がれ、成せばなる。

＝次回は25日付＝

（細田木材工業㈱会長）